

造形的な表現と鑑賞の活動に関する試論的考察

犬 童 昭 久

Consideration of the preliminary essay about molding activity expression
and appreciation

Akihisa Indo

I. はじめに

拙稿『〈私〉をつくる図画工作教育に関する基礎的考察』¹では、子どもたちの遊びを身体性を働かせた意味生成の行為としてとらえ、〈私〉をつくる²図画工作教育とは子どもたちの身体感覚の統合的な働き、すなわち身体性が働くことを最も可能にする在り方を目指し、「造形遊び」が目指した教育と通底するものであることを述べた³。本稿では上記のことを基に考察の対象を児童期から幼児期に移し、基本的なとらえ方を確認すると共に造形的な表現と鑑賞の活動に関する試論的考察を行う。

本考察において主なキーワードは「幼児」「遊び」「造形的な表現と鑑賞」である。考察を行う前提として、「遊び」を中核に据えるとともに造形的な表現と鑑賞の活動を一連の活動としてとらえるものとする⁴。

II 幼児の造形的な表現と鑑賞の活動

1. 幼児期における子どもの活動

文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の在り方や、教育内容の見直し」等も考慮に入れ、子どもの発達の早期化をめぐる現象や指摘、幼児教育の特性等を踏まえ、幼児教育と小学校教育をより円滑に接続させていくことも念頭におきながら進めていく必要がある。また、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」における領域〈表現〉においては「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする視点」が共に示されており、例えば「幼稚園教育要領」（平成29年3月告示）においては上記の視点から幼児の発達を促すものであるとし、その内容とねらいを次のように示している。

〈表現〉（3 内容の取り扱い）

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。

例えば、木々の緑を見ていると元気になることがある。それは緑の葉に心を同一化して、美しい季節とけ込むからであろう。色だけでなく、そうした匂いや音で季節を感じることもあろう。季節の色・匂い・音は人の心を浮き立たせるのであり、子ども時代に必要なのは、それらが総合されたものを体験することであると考える。様々な感動の体験をして心は育まれていく。育むとは、喜びや苦しさや悲しみも含め、様々なことを体験して育つことである。心はそうして育っていく。領域「表現」には、上述の内容が根拠として含まれているものとする。そして、そのことを基に下記のねらいが設けられているととらえることができよう。

〈ねらい〉

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

上記のことを基に、もの、身体、音声等といった表現媒体を問わず、幼児期は自分なりにさまざまな表現を楽しむことが大切であるという視点が示されている。そのうえで、感性・表現力・イメージ・創造性を豊かにする指導が求められる。なお、上記内容は小学校「図画工作科」における〔共通事項〕の内容に通底するものとしてとらえることができる。

また、幼児期は自発的な活動としての遊びを通して、周りの人や物、自然などの環境に体ごとに関わり全身で感じるなど、活動と場、体験と感情が密接に結び付いている。小学校低学年の児童も同じような発達の特徴をもっており、具体的な体験を通して感じたことや考えたことなどを、常に自分なりに組み換えながら学んでいる。こうした特性を生かし、他教科等における学習により育まれた資質・能力を学習に生かすことで、より効果的に資質・能力を育むことにつながる⁵。

なお、幼児期の子どもは、「遊び」を通して身体感覚を豊かにし、人やものやこと（事象）とのつながりを深めながら自己の世界を拡大し、自ら発達していく存在である。また、さまざまな不安や攻撃性も自由な「遊び」のなかで発散し、心の安定を得ている。「遊び」の中での挑戦は発達の原動力になっている。更に幼児期の子どもは、本来好奇心に満ち冒険や挑戦が大好きで、新規なもの・達成感が得られるものに対して意欲をもつ。「遊び」のなかでは探索や試行錯誤が自由できるので評価や結果にとらわれずにさまざまなことにチャレンジすることができ、心身の発達が促される⁶。このことから、図のように「遊び」は、幼稚園等の領域「表現」と小学校「図画工作科」をつなぐ役割も担っているととらえることもできよう。



図 「保・幼（造形的な表現）－小（図工「造形あそび」）のつながり

2. 造形的な表現と鑑賞の活動

「造形」という言葉は本来“形をつくる”という意味である。子どもの場合は“ものへのかかわり”と“ものづくり”は一連の行為であり、例えば砂いじりは「造形」ではなく砂山づくりは「造形」という区別は意味がない。「表出」のような素朴な表現を大切にするためにも“ものにかかわる表現行為”はすべて造形につながる「造形的な表現」である⁷。なお、造形的な表現の意義とは、優劣を問わず多様性を肯定することによって自信を育み子どもたちの可能性をひらくことである。このような子どもたちの身体性を働かせた、個々の存在性を生かす意味生成の行為は、意味生成の資質や能力の育成とともに、子どもたち個々の身体の深みにある非理性的なものが自然なかたちでの表出を可能にすることを期待できると考える⁸。その活動を身体性を働かせた意味生成の行為としてとらえることができよう。

なお、児童期の図画工作における鑑賞についても、「鑑賞の創造活動も、子供たち一人一人の思いや感覚をはたかせ、造形作品などのよさや美しさなどを思いのままに感じとったり味わったりする喜びを味わい、その資質や能力を豊かにしていくこと」⁹と示されるように、子どもたちが自分の感じ方や考え方によって、つまり、その子どもの論理によって思いのままに感じ取ることが重視される。この「思いのまま」ということは、身体性を生かすことであって、その子の存在にかかわるすべてのものを生かすことである。

幼児期の子どもたちにおいても様々な資質や諸能力を働かせ、それらを相互に関連させてコミュニケーションを図りながら、思いのままに「自分を表現する力」や「他者を理解する力」といった能力が育まれていく。併せて造形的な表現も一連の活動として行うことで、より質を増していく。よって、造形的な表現と鑑賞の活動は一方だけで成立するものではなく、互いが連続した活動を経て、深まっていくのである。上記のことからも鑑賞と表現は両輪の輪のような関係であるととらえることができる。

なお、発達段階上、幼児から児童への成長に従って、どのような視点で物事をとらえ、どのような考え方で思考していくのかについて取り組んでいくことが活動の中核となっていく。児童期においては、そのような活動を通して「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点を身に付け、資質・能力（「知識・理解」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を育てていくことになる。その成長の素地として幼児一人一人が感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら、意味や価値をつくりだせるような活動を目指すことは大切なことである。そこでは保育者が子どもたちへの共感と支援が相互作用的に働くことによってより改善されていくものと考えられる。

Ⅲ 造形的な表現の活動における基本的なとらえ方

1. 発達段階における幼児期の子どもの興味、達成感

幼児期における「造形的な表現活動」においては、年齢別の面白さ、楽しさの理解がまず是指導の第一歩であり、活動や素材を考える時の留意点となる。そして、その面白さや楽しさが、指導の「ねらい」にもつながっている。なお、「5領域」との関係性を考慮しつつ「遊び」を活動の中核に据えることも重要であり、このことから下記に記す発達段階における幼児期の子どもの興味、達成感を主眼において取り組むことが求められる¹⁰。

(1) 1・2歳児

- ・単純な行為の繰り返し（並べる、積む、囲む、丸める、転がす）を楽しむ
- ・クレヨンやマーカーを持って手を動かすと自然といろいろな物が生まれてくる。
- ・手を動かせばそこに「形」が生まれる。
- ・「形」は子どもが見つかるもの。

(2) 3・4歳児

- ・丸や直線、点などを組み合わせて、人や生き物（頭足人や大陽型の生き物や動物）を何度も描く。
- ・できた絵に気分に応じて様々なお話を付け加えることが楽しい。
- ・粘土や紙にほかの素材を付け足して遊び、何か見立てることを繰り返し楽しむ。
- ・紙やのりの使い方がわかり、思うように切ったり、折ったり、貼ったりして形を作って遊ぶことが楽しくなる。

(3) 4・5歳児

- ・自分の思いや印象、経験を絵に表現できるようになる。“絵は自分がつくるもの”という気持ちが育つ。
- ・材料や素材を選んでつくるのが楽しくなり、「ああすればこうなる」という見通しが少しくつくようになる。

(4) 5・6歳児

- ・手順やつくり方を意識して、技法を理解して表現できるようになってくる。
- ・道具を使いこなすことができる。
- ・友達と話し合い、意見を出し合って共同で活動することも楽しくなる。

2. 造形的な表現活動におけるポイント

活動におけるポイントについて村田夕紀は次のことを指摘している¹¹。〈誰もが同じように〉ではなく、〈誰もが自分なりに〉を目指す指導を行うという認識に立つ。そして指導の際は、まず教えるべき基礎・基本の内容を設定しなければならない。そのためには子どもの興味・関心や発達にに応じることが必要とされ、子どもの普段の様子を注意深く観察し、見極める力が求められると

している。設定内容を指導するにあたって、それが子どもの自主性を奪う抑圧的な、あるいは威圧的な指導にならないように注意しなければならない。同時に、伝えたい内容をはっきりと確実に、しかも全員に指導する必要がある。また造形活動を援助するためにも、子どもの活動を見極め、そこから子どもの思いを読み取る力が求められ、子どもの思いに共感し、活動を励ましたり、支えたりすることで、子どもが自信を深め、意欲的で自主的な態度を身につけるように関わることが求められる。上記のことを保育者が適切なタイミングで、過不足なく行うことで、子どもは造形活動に集中し、自信を深め、意欲的な態度と自主性を伸ばすのだと村田は保育現場の実態に即した見解を述べている。

また、今川公平は活動におけるポイントを次のように示している¹²。

(1) 子どもたちひとりひとりの思いを大切にする。

どんな子どもの表現でも受け止める。他の子と安易に比較するのではなく、その子なりの工夫、その子なりの表現の育ちを肯定的に見る。

(2) 表現する形や色、その構成は子どもたちが決める。

でき上がりや手順まで保育者がすべて決定しない。手本どおりに作る、描くということは手先の訓練にはなっても、創造性の育ちにはならない。

(3) 造形的な表現は「色」や「形」で遊ぶことが基礎になる。

色がきれい、美しい、形がおもしろいことが何より大切である。見たこと、知っていること、お話の表現だけが全てではないことを知る。造形の世界では、線描き遊びや色あそびなどの他愛もない遊びこそ出発点であり、基本である。

(4) 表現の世界の広さ、道具や素材について多くの知識をもち、その面白さや魅力についてよく理解する。

世界には様々な表現の形があり、それぞれに魅力と価値があって、素材や技法もその可能性はひとつではないことを知る。

(5) 教材研究は常に子どもの視点から考える。

- ・年齢に応じて、活動に自然と子どもたちが取り組みたくなるような魅力があるかどうか？
- ・子どもたちが、ああしてみよう、こうしてみようという試しや工夫する力を発揮できる場面が保障されているか？
- ・描いたり、つくったりする過程で、「おもしろい形だな」「きれいな色だな」と気づき、さらにでき上がったときに形や色という造形的な面から「かっこいいな」「きれいだな」「おもしろいな」と感じるができるか？
- ・子どもたちそれぞれが持っているイメージや思い、感情を伝えられるような幅のある活動になっているか？
- ・素材の持つ造形的な特性、おもしろさを生かせる活動になっているか？

IV 鑑賞の活動における基本的なとらえ方

次に表現の活動に連動している鑑賞の活動についても基本的なとらえ方を示したい。

まず、押さえる点として、第一点目は教育の観点から、活動のねらいと目的を明らかにすることである。鑑賞の活動において「子どもたちに何を学ばせるか」「どのような能力を育成させるか」を明確にすることが求められる。この時点で認識のずれが生じないように美術館における実践と、保育所・幼稚園における実践と分け、これらを参考にしながら課題や論点を焦点化し、対象を絞る必要がある。その上で現行の幼稚園・保育所における発達段階に応じた教育内容を基にねらいや目的を「遊び」「色」「形」「イメージ」の観点から明らかにしていく必要がある。

第二に、取り上げる対象作品について考慮する。美術の系統性や構造から作品例を「平面」「立体」「工作」「暮らしと美術」の四つに分け、そこに「遊び」「色」「形」「イメージ」を照らし合わせながら考察を行う必要がある。

第三に、発達段階に応じた内容を明らかにする。上記の内容と示し合わせながら、幼児期の発達段階に応じた鑑賞学習で取りあげるのに相応しい内容を明らかにし、児童期の活動の素地となるよう目指す必要がある。併せて実際の鑑賞の活動におけるポイントも整理する必要がある。

(1) 幼児に何を「みせる」のか

幼児は、見ることで多くのことを学ぶ。しかし視覚だけではなく様々な身体感覚・身体性を働かせながら見ており、この行為は、幼児期の成長過程においてとても重要である。したがって指導者（保育者）は、「大人のイメージ中心に考えるのではなく」、「幼児の姿」や「生活」の中から造形的な表現と鑑賞の活動をしっかりととらえることが必要となる。その視点がぶれないように留意しながら、何をみせるかを考える。なお、その際には幼児の発言に傾聴し、一人ひとりの見方をしっかりと受け止めることが大切である。また、題材（作品）の選定についてであるが、幼児は見るものも触れるものも何事も新鮮に感じている。したがって有名な作家の作品、友人の作品であろうともよい。但し、平面作品であれば、「日常の生活に結びつけられる作品（生活感）」、「自分や家族に重ね合わせて見ることができる作品（親近感）」、また「お話がイメージしやすい作品（物語性）」が良いと考える¹³。

(2) 「みる」方法を考える

未だ言語体系が確立されておらず、文字を十分に理解していない幼児には、「対話」まではいかなくとも、指導者（保育者）は、話を受け止めてコミュニケーションを取りながら進めて行くことになる。その際、傾聴することを基本とし、自然と幼児から言葉が溢れてくるような雰囲気作りに徹する。その際の教材研究は常に子どもの視点から取り組む。題材選びも大人のイメージ中心に考えるのではなく、「生活感を感じられる作品」「自分につなげて見ることができる作品」「物語・お話がイメージしやすい作品」等を取り上げる¹⁴。

留意点としては結果や作品主義ではなく「プロセスを重視」し、「生活」と表現・鑑賞をつなげ、その際には子どもたちひとりひとりの思い（主体性）を大切にし、優劣を問わず多様性を肯定する。「色」「形」「物語性」に関することが基礎となり、「色がきれい」、「形がおもしろい」等に気づかせる。また、世界には様々な表現があり、それぞれに魅力があることも気づかせることも必要である¹⁵。

(3) 発達段階に留意する

児童期以降との鑑賞とは異なり、とりわけ幼児期は成長速度が早いために月齢別でみていくことも必要となる。また保幼・小連携として学びを繋げていくためにも、幼児期に鑑賞学習の素地をつくっておく必要がある。その上で、造形的な表現と鑑賞の活動のどちらが先かではなく、両方の活動を通して発想をひろげ、造形的な表現と鑑賞の一連の意味生成の行為を通して学習の素地ができてから、次の段階へ進めていくことが理想的であると考え¹⁶。

V 造形的な表現と鑑賞の活動の実際

先に提示した内容を、造形的な表現と鑑賞の活動の実際に当てはめて考えてみることにする。ここでは幼児の美術館での鑑賞の活動を事例として取り上げるものとする。①作品鑑賞⇒②製作（造形的な表現）⇒③作品鑑賞⇒④自作品鑑賞等という工程で取り組まれた。なお、鑑賞を先に行うのか表現を最初に行うのかについては内容によって使い分けている。

活動では、講師の開会の言葉から始まった。しかし、すでに幼児期の子どもたちの発想は生じており、子どもたちは、どのような作品が取り上げられるのか、そして、どんな製作を行うのかを楽しみにしながら想像をめぐらせていたようである。本活動では、4人の子どもたちに注目した。構成は幼児A（5歳児）、幼児B（6歳児）、児童C（小学校2年生）、児童D（小学校3年生）である。特に幼児Aの様子をみていくことにした¹⁷。

講師によって平面作品について、スライドを見せながらわかりやすく説明が行われた。スライドの情報量は要点だけに絞って少なくされ、画像と文字もシンプルに表示され、クイズも交えながら幼児にもわかりやすい説明がなされた。その後、普段は展示ケース越しにしか見ることのできない作品を子どもたちに間近でみてもらった。初めて間近に作品を見るインパクトはあったであろう。子どもたちの驚きの表情からそのことを窺うことができた。その後の活動は次のとおりである。

【製作（造形的な表現）】

- ① コピーの上に和紙（半紙）を置く。
- ② 模写体験を行うため筆ペンでなぞる。
- ③ 黒と灰色のコンテで色を塗る。

活動では、支持体として和紙（半紙）を用いた。和紙の肌触りを触って楽しんでた。透けて見える特徴にも驚いていた。最初に筆ペンで透けて見える線に沿ってなぞっていくのだが、子どもたちは、初めて触れるその不思議な支持体・素材に、興奮し、戸惑い、最初はなかなかうまく行かない様子だったが、そのうち筆ペンの描画の特徴に気づき、細い線や太い線、擦れた線などを駆使しながら描いていった。描きながら、様々な発想が湧いているようであった。そのことは「おもしろい」といったつぶやきからも窺うことができた。その後の活動を幼児（5歳児）Aの様子を中心にみていくことにしたい。

幼児Aは、最初はたどたどしい筆の使い方だったが、活動後半では、まるで手の延長としての身体の一部のように使いこなしていた。その筆で和紙に黒の線を引いた。そのことによって和紙にひとつの新しい状況（意味）が生まれることになる。つまり、そこに自らの感じ方、考え方で新しい意味をつくるということが、先の行為を受けて始まったのである。何度か周りの子ども達

の活動の様子をじっと見ている場面が見受けられた。リアルタイムで作品が出来上がっていく様子を鑑賞していたのである。無言ではあったが、作品の出来上がりを様々な想像を膨らませながら見ていたのではないかと思われる。

しばらくして、幼児Aは、そこで岩の形としての面白さや、凹凸の表現の面白さを発見したようである。つまり、その線は何か別のイメージさせることになった。そして、机中央に置いてある黒色のコンテをとり、それを先程の描いた岩に色を塗ることを試みた。塗り方も、手前から外へ押し出すように塗ることで、また塗った雰囲気が変わることを発見したようであった。それらのことを繰り返すことによって、そこに何か別のイメージし、また新たな意味が立ち現れることになったものと思われる。絵は2枚で構成されており、上半分と下半分を別々に配布していた。それぞれできあがった絵を組み合わせると、作品鑑賞でみた作品と同じ構図のものができあがる仕組みになっていた。児童達はその仕組みを、すぐに理解していたが、幼児達はこの段階で初めて気づいた様子であった。なお、他の児童の上半分と交換し組み合わせ、その変化を楽しんでいた。幼児Aは、その描いた絵の線の太さや勢い、色を比べながら、また新しい発想を行うことになった。そして、それをみていた隣の幼児Bもその面白さの状況に触れ、夢中になって、自分なりの面白さを発見しようとしていったのである。そこでの行為はさらに広がりが増しながら展開していった。また、他の幼児や児童の活動の様子を観察したり、意見を求めたりして、大人が思う以上に、順応し、様々な創意工夫をしている様子が見て取れた。

その後の展示会場での作品鑑賞では、多くは語らないが、感嘆の声や目を輝かせて作品に見入っている様子がみられた。さらに、製作会場に戻ってから、自作品や他の子どもたちの作品をみてふりかえり（フィードバック）ができていたのであろう。このように子どもたちの行為は様々な展開していく。上記はその一場面である。

上記のような幼児期の子どもたちの一連の活動の展開をみると、子ども自身が状況とかかわり合いながら、自らの内に秘めた能力を引き出し、新たな自分をつくっていく活動を展開していくことが可能となる様子を見ることができるといえる。幼児期の子どもたちにおいては、本物の作品、自作品、友人の作品、様々な作品をみる鑑賞の活動のみならず、制作等の表現の活動を通した一連の活動体験は、児童期の美術鑑賞への素地をつくるのである。

VI 創造活動としての造形的な表現と鑑賞の活動

幼児期の子どもたちは対象や素材等にかかわりながら、その特性をとらえ、その子なりの方法で表現をしている。例として作品を「手がける」ことについていえば、子どもが素材とかかわる瞬間から、想像力等が生まれ、様々な体験が始まっているといえる。このような「手がける」という能動的な「動き」が全ての始発点であるとする考えについて、佐々木正人・佐伯胖は次のように述べている。

人が「動く」というのは、動こうとする意図があるからである。この「動こうとする」だけで、私たちのからだの構えが変わり、方向づけられる。そればかりでない。こちらが「動こうとする」ことによって、外界そのものが「見えて」くる。そこでわたしたちはまさしく外界と「出会う」わけである。行動（アクション）というのは、そういう出会いの場

での、外界に対する「呼びかけ」として行使される。すると、今度は外界がその呼びかけに応じて、予期しなかった様相を提示し、私たちの構えを変えてしまう。私たちはそこで、自分の身体に生じる構えの変化から外界の予期しなかった意味を抽出し、当初の意図を修正し、修正された新しい意図のもと、あらためて動こうとする。人間の認知（判断や思考）は、実はこういう外界との相互作用の中で作りだされ、また修正され、そして行動（アクション）を始発させている¹⁸。

このように考えると、幼児期の子どもたちが認知をひろげていく過程に、子どもたちの学習の過程に対しての幾通りかの示唆を読み取ることができる。そして、子どもたちがその経験を自らひろげて新しく作りかえていく過程に重ねることができる。なぜならば、先の事例でみることができたように、子どもたちは視覚だけでなく、身体全体を使って自分を含めた環境の中に情報を受け取り、さらに新しく図式をひろげ、洗練させていくことのできる有能で可能性をもった存在といえるからである。したがって、造形的な表現と鑑賞の一連の活動も、素材の発信する情報を子どもという主体が、その子なりの思いや願いに合わせて受け入れ、子どもと素材との相互作用の中で展開されている行為といえる。そこでは素材に対してのあらかじめ用意された知識としての物理的な機能性や操作性の特性よりも、「かかわる」ことによって初めてその素材から立ちあらわれてくる情報を知覚することが重要になってくる。そこでは一連の造形的な表現と鑑賞の活動が行われていくことで、子どもたち一人一人が自分の思いや感じ方で、つまり、それぞれが自分の身体性を通して対象や素材等に進んでかかわり、そこから発想を行い、試み、自分の表現を新しく〈作り、作りかえ、つくる〉といった行為が展開していく意味生成の行為となる。

以上のことから、教育の在り方で中心となるのは子どもたち一人一人であり、その身体性が思いのままに働く学びであるといえる。そのときはじめて、その子の身体の深みにある存在の根拠となるかけがえのなさをかかわらせ、それを立ち上げる活動を展開することができていくことになる¹⁷。以上に述べた、造形的な表現と鑑賞の活動も、その身体性の働きによってなされるとともに、鑑賞指導者（保育者）の共感と支援が相互作用的に働くことによって、その子の感覚や経験も充実したものとなっていく。そのようにとらえるならば、活動の在り方として、子どもたちのよさや可能性を指導者（保育者）が信頼することによって、子どもたちの身体性の働きが発揮され、そのことによって創造活動が充実していくということが期待できる。

Ⅶ おわりに

幼児期に適切な鑑賞にて取り扱う内容はどのようなものなのか。これらの考察課題を全て明らかにするのは容易なことではない。鑑賞における内容の全体像をえがくとすると、それはきわめて大規模で本格的な分析を必要とする。そのため今後も分析の目を広げ、且つ幼児期の子どもたちの実態にも光を当てて考察を進めたい。本稿では試論的な考察に留まったが、引き続き幼児期における活動も視野に入れ、エマージェント・カリキュラムの視点から効果的な鑑賞の指導方法も見極めながら実践し、造形的な表現と鑑賞の活動における学びのプロセスの可視化を通して、子どもの造形的な表現活動の学びについて検証を行っていきたいと考える。

付 記

本研究はJSPS科研費 JP26381294の助成を受けたものである。

注

- 1 拙稿, 「〈私〉をつくる図画工作教育に関する基礎的考察—遊びの持つ教育的意義と身体性の意味を手がかりに—」, 九州ルーテル学院大学研究紀要VISIO, 2014, pp. 53-66.
- 2 〈私〉をつくることは、子どもたち一人一人が自分の思いのままに対象などにかわり、想像力を働かせて何らかの活動のイメージを描き〈私〉の存在の根拠である身体の深みの感情などを立ち上げる活動が展開されることである。すなわち、身体性によって新しい意味あるかたちをつくり、つくりかえていくという意味生成の活動が展開されることであり、それにともなって子どもたち一人一人の存在の根拠である個々の身体の深みがかかわる感覚や思考などが表現・表出されるとともに〈私〉がつくりだされる喜びである。なお、ここでいう身体性とは、心と身体が分けられた身体のことではなく、心身が統合されたものであって、個の存在性そのものである。したがって、この身体性の働きがあって、はじめて、その子の意味生成の行為が可能となると考える。その意味では、身体性の働きと意味生成の行為は同時に成立するといえる。既成の意味の再現を目指すのではなく、新しい意味をつくりだす行為である。上述は次の文献の言説を参考にしている。拙稿, 「つくることの教育の構築と実践に関する研究」, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科, 1999.
- 3 その根拠は拙稿「つくることの教育の構築と実践に関する研究」に詳しく述べている。なお、「つくることの教育」では造形遊びを基盤とした造形的な表現を主に取り上げた。
- 4 本稿では鑑賞の活動を視覚のみを駆使する単なる体験活動ではなく、身体性を働かせた活動とし、造形的な表現の活動に連動しているものとしてとらえている。
- 5 文部科学省, 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 平成29年6月, p. 109.
- 6 槇英子による言説を基にしている。槇英子, 「保育をひらく造形的な表現」, 萌文書房, 2008, p. 50.
- 7 同上, p. 11.
- 8 文部省, 前掲『小学校 図画工作 指導資料 新しい学力間に立つ図画工作の学習指導の創造』, pp. 31-32.
- 9 同上, pp. 32-33.
- 10 次の文献を基にしている。村田夕紀, 「3・4・5歳児の楽しい絵を描く実践ライブ」, ひかりのくに, 2011.
- 11 次の文献を基にしている。村田夕紀, 「児造形指導の試み—豊かな表現を引き出すために—」, 四天王寺大学紀要第50号, 2010, p. 229.
- 12 次の文献を基にしている。今川公平, 「子供の造形 画像・準備・ことばかけ・褒め方」, ひかりのくに株式会社, 2007, pp. 6-7
- 13 米国における「保育者向けの教本」を基にしている。John Holdren, “What your kinndergartner Needs to Know”, Bantam, 2013.
- 14 幼児はV T Sの手法を中心に、児童は低学年はV T Sの手法、中学年以降是对話型鑑賞学習が効果的であると考える。次の文献を基にしている。Yenawine, Philip Visual thinking strategies: using art to deepen learning across school disciplines / Philip Yenawine Harvard Education Press c2013.
- 15 槇英子, 「保育をひらく造形的な表現」, 萌文書房, 2008, p. 50.
- 16 ハワード・ガードナーによれば、プロジェクト・スペクトラムにおける一連の考察結果から、鑑賞の活動として表現との一連のプロセスを重視する。見ることに終始する鑑賞活動ではなく、柔軟な可変的な活動であれば、幼児・児童期においても効果が期待できると指摘している。上述は次の文献の言説を参考にしている。池内慈朗, 「ハーバード・プロジェクト・ゼロの芸術認知理論とその実践」, 東信堂, 2014.
- 17 『めざせ! 雪舟流と狩野派鑑定団』【日時】2015年9月25日(日) 10:30~12:00、【場所】熊本県立美術館本館講堂、19名(幼児2名、児童1年6名 2年4名 3年6名 4年1名)
- 18 佐伯胖・佐々木正人編, 『アクティブ・マインド』, 東京大学出版会, 1990, p. ii.